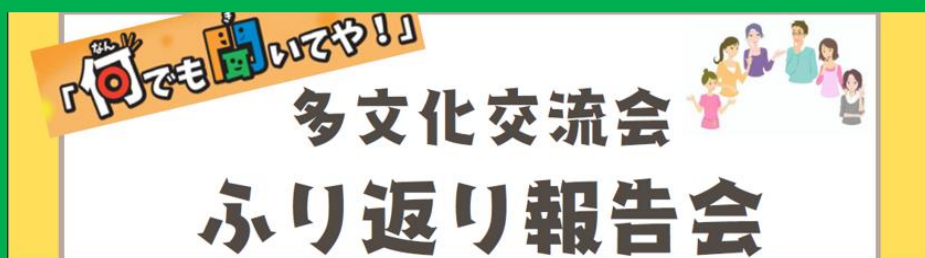


令和6年度



令和7年1月26日（日） 14:00～16:00

実施報告書

令和7年2月

主催 公益財団法人 大阪国際交流センター

協力 社会福祉法人 大阪市社会福祉協議会

この事業は、一般財団法人 自治体国際化協会の助成を受けて実施しました。

 一般財団法人
自治体国際化協会

■はじめに

当財団では、日本人住民と外国人住民が地域でつながり、誰もが安心して暮らせる大阪をめざして、令和 3 年度から大阪市内の各区で、「多文化交流会」を開催しています。

この交流会は、外国人住民から、大阪への思い、これまでの大阪での生活で良かったこと、また困ったことなどの話を聞くとともに、日本人住民からも外国人住民に聞きたいことや、言いたいことを共有することにより、相互理解を深める場として開催しました。

令和 6 年度も、福祉社会福祉法人 大阪市社会福祉協議会や各区の社会福祉協議会、また各種団体からのご理解やご協力を得ることにより、ともに「多文化交流会」を開催できたことを大変嬉しく思います。

今年度は、4つの区で実施させていただきましたが、そのうちの 1 つの区では、「地域の日本語教室」での開催とさせていただきました。日本語を学習されている、近隣地域の住民である外国人住民と、日本語学習の支援をされているボランティアのみなさんを対象に実施しました。

来年度以降につきましては、「地域の日本語教室」を拠点に、この「多文化交流会」を開催し、さらに地域の住民を巻き込んだ形で開催することにより、外国人住民が地域とのつながりを生み出し、顔の見える関係を築いていく一助としていきたいと考えております。

これらの実施を通じて、誰もが暮らしやすい、また災害時にも強い「多文化共生のまちづくり」をめざすとともに、日本語教室と財団との関係強化を図り、外国人住民の日常の困りごとへの対応や、災害時における情報提供へとつながることを期待しております。

お互いが文化の違いを知り、相手を理解することにより、皆さんが住む地域で、顔の見える付き合いを進めていっていただき、この取組みがさらに進み、地域の自主的な活動として拡がることで、誰もが安心して、安全に暮らせる魅力的な大阪をつくっていきたいと思っております。

今後も「多文化共生社会」の実現に向けて、様々な取組みを進めてまいりますので、皆さまのご理解ご協力を賜りますようお願いいたします。

公益財団法人 大阪国際交流センター
理事長 岸本 孝之

■開催概要

1 趣旨・目的

令和4年度より(一財)自治体国際化協会から助成を受け、毎年年度初めに多文化交流会キックオフとして大規模なイベントを開催し、その後、各地域で多文化交流会を実施している。令和6年度の多文化交流会は、『防災』をテーマに、地域の外国人住民と日本人が共に防災意識を高め、災害時における支援のあり方を考えることを目的に実施した。

今回の振り返り報告会では、今年度実施したそれぞれの「多文化交流会」の担当者や外国人スピーカーに登壇してもらい、その内容の発表や新たな気づき、その後の成果等を共有する機会とするため実施、今後、参加者が自地域での取り組みをさらに発展させるためのアイデアを交換し、今後の活動に繋がるきっかけ作りの場とした。

2 開催日時および場所

令和7年1月26日(日) 14:00~16:00 大阪国際交流センター 3階 中会議室・いちよう

3 参加者

30名(大阪市・区社会福祉協議会、一般公募による参加者等)

4 内容

(1)令和6年度の実績報告(事務局)

(2)各開催区報告 コーディネーター 梅元理恵 ((公財)大阪国際交流センター 事務局長)

- ・開催経緯や感想、その後の取り組み、参加者の意識の変化等について
- ・交流会に参加した外国人の感想やコメント

(3)グループディスカッション

- ・グループに分かれて各区との意見交換(2~3回ローテーション)

(4)グループ発表・まとめ

<登壇者> コーディネーター 梅元 理恵

パネリスト (各区での実務担当者4名(4区)、外国人参加者5名)

【西 区】

区実務者:吉田 美幸 氏 ((社福)大阪市西区社会福祉協議会)

外国人参加者:バンダリ ディパク 氏 (ネパール)

【中央区】

区実務者:脇田 香 氏 ((社福)大阪市中央区社会福祉協議会)

外国人参加者:チャン ティ ミン トウ 氏 (ベトナム)

【西淀川区】

区実務者:福留 氏 (出来島識字・日本語交流教室コーディネーター)

外国人参加者:鈴木 美貴(李 雪梅) 氏 (中国)、イン レイセイ 氏 (中国)

【東成区】

区実務者:内原 隆志 氏 ((社福)大阪市東成区社会福祉協議会)

外国人参加者:サフ ヒミカ 氏 (インド)

■多文化交流会「何でも聞いてや！」ふり返り報告会総括

1 令和6年度の実績報告(事務局から報告)

(1) 開催回数 6回

(2) 参加者数 405名(うち、外国人 65名)

(3) 開催実績・共催者(※)

①キックオフイベント シンポジウム(日本で暮らす～災害に備えて～)

令和6年6月16日(日)

②地域の防災力UP!外国人といっしょに考えよう(防災)

令和6年7月27日(土)

※大阪市立阿倍野市民学習センター

<各区多文化交流会>

③西 区(防災) 令和6年12月11日(水) ※西区社会福祉協議会

④中央区(防災) 令和6年12月12日(木) ※中央区社会福祉協議会 (協力:ファースト・スタディ日本語学校)

⑤西淀川区(防災) 令和7年1月14日(火) ※出来島識字・日本語交流教室

⑥東 成 区(防災) 令和7年1月18日(土) ※大成ネットワーク委員会

2 各区報告(コーディネーター 梅元 理恵)

(1)【西区】

(実務担当者から)

・西区には14の地域がある。今回「防災」をテーマに、各地域に参加の声掛けをした。結果、地域の役員の人をはじめ、地域からもたくさん参加していただくことができた。当日、参加者は5グループに分かれ、外国人スピーカーも5人来ていただき、2時間楽しい時間を過ごした。

・参加者からは、地域内で外国人の増加を実感しており、(公財)大阪国際交流センターからの実践講座の資料からも外国人が増えていることが分かった。特に、西区における外国人比率が7%であることを知り、より身近に感じるべきだという意見があった。

・グループワークでは、外国人住民の人からの話を直接聞くことができた。外国人スピーカーの中には台風は経験しているが、地震は経験したことがない人が多く、少しの揺れでも恐怖を感じるということが伝わった。また、防災訓練については「そもそも備えの意味が分からない」という意見もあり、どのように伝えていくべきかを考えるきっかけとなった。

・また、参加者の中には、「外国人は言葉が通じないのではないか」という不安を持つ人がいたが、交流会を通じて、外国人スピーカーの日本語能力が高く、円滑なコミュニケーションが取れたため、地域との橋渡し役を担う外国人が増えれば、さらに住みやすい街づくりが進むのではないかという意見もあった。

・今回参加された人の中には、「防災」「外国人」ということで何となく参加した人が多かったが、いろいろなヒントや新たな気づきがあったという声を頂戴した。

(外国人の参加者から)

・「困っていたら助けしてくれるのは大阪人」という言葉が印象に残り、困ったことがあれば外国人も多く助けてもらえると感じた。

- ・防災に関して、ネパールにも地震はあるが、海はなく台風もあまりない。そのため、日本でこのような災害が起きた場合、どのように対応すればよいか、またどのように準備を進めるべきかを教えてもらい、家に帰ってから家族とその内容を話し合った。
- ・外国人として日本人と一緒に暮らしていく方法や、ネパール人として日本にどのように伝えていくべきかを考える良い機会となった。これからも日本人の方々と一緒に安全で安心な生活を送っていきたい。

(2) 【中央区】

(実務担当者から)

- ・普段見守り相談室では、要援護者と言われる高齢者や障がい者の見守り活動を行っている。
- ・地域での見守り活動では民生委員をはじめ、中央区社会福祉協議会に所属する地域福祉コーディネーターが中心となって、中央区の中で17地域に分かれて見守り活動を行っている。
- ・最近、要援護者名簿に外国人の名前が散見され、地域福祉コーディネーターからも「ごみの出し方が分からない」、「訪問すると娘と話がうまくできない」という相談があった。
- ・オールドカマーと呼ばれる在日コリアン1世や2世の介護が進んでいる。その一方で、1980年代以降日本に来られたニューカマーと呼ばれる、様々な国や地域からの高齢者が今後増えていくことが予想される中、どのようにコミュニケーションをとっていくかが見守り活動をしているコーディネーターの人にとって一つの課題であった。
- ・当日は、中央区にあるファースト・スタディ日本語学校に通っている留学生や地域に住む外国人住民、地域福祉コーディネーターと一緒に「防災」をテーマに交流会を実施した。
- ・地域福祉コーディネーター連絡会として外国人との交流は初めての取り組みだったため、最初は職員の間でも戸惑いが見られたが、交流が進むにつれ、「やさしい日本語」で積極的に話しかけるようになり、各グループから笑い声や明るい声が聞こえた。
- ・交流会や実践講座の感想は好評であり、外国人とコーディネーター双方が、今後地域で交流を深めていきたいという意見があった。この交流会での体験を今後の見守り活動に活かしてもらえるのではと感じている。これをきっかけに、今後もこうした取り組みを継続していければ良いと考えている。

(参加者の立場から)

- ・ベトナムでは災害が少なく、日本に来る前は災害が発生する際に、何をどうしたらいいのかまた何を準備すべきか全く分からなかった。多文化交流会を通じて、役立つ情報を得ることができたし、自分の悩みを話し、皆さんの防災経験や知識、備えの内容を学ぶことができた。
- ・帰宅後、すぐに防災バッグを用意したり、携帯でニュースを確認したり、必要なものをすぐに使えるように準備した。備えることの重要性を感じ、少しずつ準備をすることで、災害の際に自分の命を守れるようになって実感した。
- ・多文化交流会は友達を作る場であり、異文化や知識を学べる機会として非常に良いと思う。

(3) 【西淀川区】

(実務担当者から)

- ・出来島識字・日本語交流教室は、大阪市教育委員会が実施している地域の日本語教室で、2008年から実施。毎週火曜日午後7時から8時30分まで区内のボランティアを中心に在住外国人に日本語学習支援を行っている。
- ・コロナ禍を含む社会情勢の変化もある中、学習者が0人の時もあったが、続けてほしいという大阪市教育委員

会からの依頼もあり、続いている。学習者やボランティアの人数にも変動はあるが今のところ、参加者は大体 20～30 人である。

・今回、財団から多文化交流会開催の話聞いて、学習者の中には日本語が上手な人ばかりではない、ひらがなカタカナが読める程度、英語は話せるけど日本語はゼロという人もいるなか、この「交流会」はどうなるかなという不安があったが、教室のみんなのためになればという思いで引き受けて、実施した。

・西淀川区は地盤が低く、津波水害に弱い地域のため、コロナ前までは毎年 3 月に区の出前講座を活用し、やさしい日本語で地震や津波、洪水、水害などの防災学習を行っていた。今回新たに防災学習の機会をいただきありがたいと思った。

・今回はポルトガル語の通訳者が来てくれたが、ブラジル人の学習者と流ちょうに話し合う様子を見て、学習者の新たな一面を垣間見ることができ、こんな一面があるんだ！とすごく感じ、驚きもあった。

・参加者からもこのような交流会を日本語学習とは別に定期的にするといいのではという意見があった。

・各団体と協力して、この教室が地域の外国人を守る最前線になるようにコミュニケーションをしっかりとって、今後も頑張っていきたい。

(参加者の立場から)

・外国人は日本の生活にまだ慣れていない。防災の大切さを心掛けたい。

・多くの外国人は防災の知識がないと思う。私はこのような交流会に参加して防災について勉強することができた。この交流会に参加して地域の住民を深く理解することができたので心から感謝したい。

・今まで地震を経験したことはなく、防災知識もほとんどなかった。この交流会に参加して地震の恐ろしさを知ることができた。

・交流会で日本人住民から「一番怖い災害はなんですか」と質問があった。私はすぐ「津波」と答えたが日本人住民の皆さんは「地震」という答えだった。それは、津波は地震が発生してから起きるので逃げる時間があるから。でも地震はいつどこで起きるか分からないからであった。

・交流会が終わってすぐに避難所マップやガイドブックを読んで、避難カードも作った。交流会に参加したからこそ今回「防災」に関する意識が変わった。本当にありがとう。

(4) 【東成区】

(共催者の立場から)

・東成区は小学校が 11 校あり、その地域に地域福祉活動サポーターという人が配置されている。

・地域福祉活動サポーターは普段から地域の身近な困りごとの相談を受けていて、月 1 回サポーター連絡会として区社会福祉協議会の会議室で情報交換をしている。今回はその一環として、(公財)大阪国際交流センターに来てもらい、防災をテーマに多文化交流会を実施することになった。

・東成区は小さな区でお昼間の人口と夜の人口が変わらない、都会の田舎とよく言われるような区なのであまり外国籍の人がいるイメージが地域の中ではなかったが、財団からの実践講座で大阪市内でも外国人比率が 5 番目に高く、ミャンマーからの方がたくさん住んでいる話は、新たな気づきであった。

・外国人スピーカーは、日本に来て 6 か月の人から 17 年住んでいる人もいて、また国籍も違う人が来てくれたのでいろいろな話が聞けた。

・グループワークでは、地震が起きたらまずどういった行動をするかについて、地域の人が教えていたり、年配の参加者が多かったので、多文化交流と言いながら、過去の水害の様子などの話も交えながら、世代間交流の

ような意味合いもすごく強かった。

・この地域では、毎月駄菓子屋のイベントを、地域の集会所で開催しているが、今回外国人スピーカーとして参加してくれたベトナム人の留学生がボランティアとして活動してくれたり、早速地域とのつながりができていることはとてもうれしく思う。

・最後に外国人スピーカーから、日本人は話の中で「あれ、それ」と意味が分からず何をしたらいいか分からないという話があった。意識をしないと言ってしまうことが多いので、外国人にはしっかりやさしい日本語で伝えるという気づきもあった時間であった。

(参加者の立場から)

・インドには地震がなく、どういうものなのか分からない。日本に来てからも経験したことがないので、地震がどのくらい恐ろしいものかは分からないけれど、交流会で 30 年前の阪神淡路大震災の話聞いてとても怖いと思った。

・このような交流会に外国人が参加することでいろいろ勉強になると思った。

(コーディネーター 梅元)

・防災をテーマにいろいろな話を聞いたりする中で「やさしい日本語」という言葉が出たが、これは、日本人が外国人とコミュニケーションをとる時により伝わりやすく、やさしくした言葉をで話すことである。今では外国人が増えており、全ての言語対応を行うことは難しいということからやさしい日本語が広がってきている。

・外国人を守る最前線として地域の日本語教室を活動しているという力強い言葉は印象的であった。

・地域に住む外国人とその地域に住む日本人をつなげれないかと考えていく中で、今回、出来島識字・日本語交流教室の協力を得て実施することができた。地域の日本語教室にはその地域周辺に住んでいる人が通っているというところで、過去の大きな災害の中でも日本語教室が果たした外国人支援の役割は多い。

・外国人スピーカーから、日本人と話すことで学んだというような話があったが、知らないことを教え合える、私たち日本人住民も外国人のことを知らないともうので、教え合いながら知り合いながら関係を築くことが大事と思う。

3 グループディスカッション(コーディネーター 梅元 理恵)

・グループに分かれて各区との意見交換

(各参加者の希望に基づいてローテーションで班分けをし、3 回実施。各回 20 分ずつ)

4 グループ発表・まとめ

(1) 【西区】

・外国人スピーカーに対しては、「出身国の、日本でのコミュニティについて」「学校で習った日本語と、生活する中での日本語の違い」「言葉以外で、日本で困ったこと」など質問が多かった。

・ディバクさんからは、それぞれの質問に対して丁寧に回答していただいた。「全国にネパールのコミュニティがあること」「今年の 4 月に、関西で初めてネパールフェスティバルが開催されること」、また、日本語の勉強は学校で学んだものを基本に、生活の中でコミュニケーションを通じて学んでいることや、困っていても時間とともに慣れてくるので大丈夫、という内容で、質問に対する回答という形でお話をいただいた。

・また、参加者の 1 人から「自分の近くにもいろいろな国の人がいるが、コミュニケーションをどうしたらいいのか」という質問があり、ディバクさんから、自分が住んでいるマンションでは月 1 回の掃除に参加したり、自分から「お

はよう」とあいさつをしたり、コミュニケーションを取るようにはどうかというアドバイスがあった。

(2) 【中央区】

- ・外国人スピーカーに、区役所から届いた難しい手紙はどのように理解するのかの質問があり、トウさんは職場の人や、組合の人に写真を撮って送って聞いたり、1人でインターネットを使って調べたりするということであった。
- ・外国人高齢者の介護についての質問があった。

これまでは在日コリアン高齢者の介護に関しては、その3世、4世の人が介護施設等を作ったりして介護をしていたが、今後、東南アジア出身や中南米出身の高齢者が増えると思う。その人たちに対して、自身の出身国や地域の施設を作ったらいいのか、ということではなく、誰にでも開かれた介護施設があり、対応できる仕組みづくりが大事と思う。災害もそうであるが、普段の関わりが大事であり、「助ける側」や「助けられる側」という一方的な役割を越えて、1人の人間として関わっていったらいいなと思う、という話をした。

(3) 【西淀川区】

- ・「日本での生活で、一番困ったこと」についての質問が多かった。
- ・やはり、言葉が一番困る、とのこと。日本語が上手な人もいるが、聞くことができるが自分の意見を話すことは難しく大変。また、病気になった時には救急車も知らないし、やはり何が起きたのか説明できないという言葉の問題がある。
- ・他にもいろいろ質問があったが、国や地域によって事情がいろいろ違うので、教育委員会の人や区の担当者とも情報共有をしながら、活動をしていきたいと感じた。

(4) 【東成区】

- ・災害が起きた場合、情報はどこから入手するのかという質問に対して、留学生であれば、通っている学校の先生が連絡を取ってくれるので安心できることや、会社勤めの人であれば会社から情報が手に入るだろう、という話をした。一方、専業主婦だったり、何か組織に属していない人だったり、そういった情報っていうのはなかなか手に入りにくいのではないかと。SNS等インターネットで情報を入手できるかもしれないが、日本の知り合いが少なかったり、情報になかなかアクセスできなかったり、孤立したりする可能性もある。何か組織に属していない外国人にとってはこれからの課題ではないか、という話をした。
- ・その他、外国人スピーカーに対して日本に来た理由や、将来の夢などに聞いて話をした。

(5) まとめ(コーディネーター 梅元 理恵)

- ・様々な話が各テーブルであったかと思うが、そのなか中でも「言葉」の問題が共通してあった。
- ・まずは、「おはよう」とか「こんにちは」という挨拶でコミュニケーションは始まる。伝わらなくても、とにかく顔を見たら挨拶をして、声をかけることで、コミュニケーションが始まるきっかけになると感じる。
- ・今回、「防災」をテーマに多文化交流会を開催していく中で、外国人から地域で実施している防災訓練がいつでもどのように行われるかわからない、といった声を数多く聞いている。区や地域で防災訓練などがある時に、一緒に参加することで、より知識や理解が深まると思われるので、声がけをして、ともに参加してほしい。
- ・災害情報については、正確な情報にたどり着くことが最も重要である。当財団では、災害が起きた時に外国人の皆さんに情報を届ける役割として、大阪市との協定の中で、「災害多言語支援センター」を運営することになっている。皆さんのご近所やお知り合いの外国人がいれば、当財団をはじめとする、国際交流協会が「災害多言語支援センター」として、自治体や災害対策本部、国などから発信される「正確な情報」を翻訳して発信するので、

災害が発生した際には、ぜひ、皆さんから伝えていただきたい。また、NHK ワールドがかなり災害に関しても力を入れており、多言語で情報発信をしているので、そちらについても一度、ホームページを見ていただき、あわせてお知らせしてほしい。

・日本人と外国人の住民が同じ地域に暮らす中で、よくトラブルとして上がってくるのが、騒音であったり、ごみ出しのマナーであったり、また地域活動に参加しない、町会の活動に参加しない、というような事柄である。日本の習慣や地域のルールなどを知らないために起こるトラブルもあるので、きちんと伝えられる場、『対話』する場や機会を持つことが重要である。

・まずはお互いを知ることから、気軽にいろんな話をする場を作っていただくためにも、財団としてはこの事業「多文化交流会」を実施している。

・特に、お互いが助け合える関係を普段から作っていただくことが大切であり、それが災害時にもいかされる。日本では、高齢化がどんどん進んでいるが、一方で、外国人の住民の皆さんは比較的若い世代(20~30代)の人が多くことから、お互いに助け合いながら暮らしやすい地域を作っていく、という意識を持つことが重要である。

■事業の成果 ～アンケート結果から見えてくること～

今年度の事業では、大阪市社会福祉協議会・区社会福祉協議会や日本語学校・地域の日本語教室との連携を活かし、地域住民と地域に暮らす、また関わりを持つ外国人住民が、「多文化交流会」の開催を通じてつながりを持つことができた。また、地域の外国人住民と、日本人住民がつながる場として、「地域の日本語教室」を中心とした多文化交流会の開催が鍵となると考え、今年度初めて、出来島識字・日本語交流教室(西淀川区)にて試行的に実施することができた。

「多文化交流会」では、財団から「多文化共生実践講座」として、その地域の外国人住民の状況を知ってもらうことを目的に、日本、大阪市とその地域(区)の状況を講義形式で説明を行った。外国人住民数や在留資格等による分類等など、主に、数値を示すことにより、改めて身近に外国人住民が存在することについて、客観的に認識してもらえらる場となった。また、今年度は「防災」をテーマに実施したが、外国人スピーカーが自らの言葉で自分自身の考えや意見を伝え、地域住民と外国人住民の相互理解・共生を深める機会となった。

最終、令和7年1月に開催した「ふり返り報告会」では、実際に多文化交流会に参加した参加者から感想を共有し、「どこに相談すればよいか分からなかったが、報告会を通じて行動に移す勇気が湧いた」、「他地域の事例を参考にして、具体的に交流活動を始めたいと感じた」といった意見があった。参加者全員が積極的に交流し、地域活動の重要性を再認識する場となり、地域での多文化交流の拡大に向けたきっかけ作りの一助となった。

また、そのアンケート結果では、「日常的なつながりが多文化共生社会に不可欠だと感じた」「ディスカッションを聞いて参考になった」、「他地域の取り組みを知り、自分の地域でも多文化交流活動をしてみたいと感じた」といった声が多く寄せられた。また、93%の参加者が「大満足」または「満足」と評価し、交流を通じて新たな気づきやアイデアを得られたとともに、日常的なつながりの重要性を感じていただけたことが大きな成果であると実感している。

運営面では、昨年度のアンケート結果にて、グループディスカッションで「時間が足りなかった」という意見があったことから、前半部分(第1部)における財団からの講義の部分で、ポイントを絞って説明し、第2部のグループディスカッションの時間をなるべく確保するよう努めた。

今年度も多文化交流会を通じて地域住民同士の理解を深め、共生の意識を広げることができたと実感しており、外国人住民と日本人住民が共に生活しやすい環境づくりをめざし、今後も継続的に地域交流の促進を支援して行く。

■今後に向けての展望 ～次年度以降の方向性も踏まえて～

外国人住民数は年々増加しており、令和6年(2024年)9月末時点での大阪市外国人住民数は、184,500人となり、大阪市の人口(277万)の6.65%を占め、15人に1人が外国人住民となっている。

外国人住民と日本人住民が地域でつながり、顔の見える関係を築いていくことを目的として、令和3年度より実施している「多文化交流会」(助成を受けての実施は令和4年度より)の開催を通じて、日本人住民の外国人に対する理解は進んできた。しかし、この間、同じ地域に暮らす住民同士の交流・理解が課題となっており、今後は対象地域とつながりのある外国人住民の参加を促していきたいと考えている

今回、試行的に実施した地域の日本語教室における「多文化交流会」では、通訳者を交えての交流会となったが、日本語教室の支援者からは、「時々、このような会を設けて、一つのテーマについて話し合っ、色々なこ

と(情報)を共有したい」「コミュニケーションがとれてよかった」「とても流ちょうに話す姿を初めてみた」などの声があり、日本語教室が日本語の習得支援だけでなく、様々な情報の共有の場としても機能を果たすきっかけ、可能性があることを、改めて実感し、その存在の大きさについても再認識した。

このように知ろうとする機会や、つながるきっかけを提供することにより、また新たな気づきが生まれていくことは、多文化共生をめざすうえで重要であり、今後の地域における交流を広げるための礎となるものだと考える。

地域の日本語教室は、外国人にとって身近な存在であると同時に、いざという時に相談できるセーフティネットとしての役割も果たしており、当財団としても関係構築を進めることで、平時だけでなく災害時などにも有効なネットワークとなると考えている。次年度以降は、外国人住民とさらに地域とのつながりを構築していくため、その日本語教室を拠点として、外国人参加者と日本語教室の支援者であるボランティアだけではなく、開催地域(区)の、町会等の役員等を巻き込みながら、「地域の日本語教室」を中心とした多文化共生のまちづくりを念頭に置き、その地域の住民がつながり、顔の見える関係を築くことにより、より暮らしやすい地域をめざしていくための一助として、多文化交流会を展開していきたいと考えている。

引き続き、大阪市社会福祉協議会・区社会福祉協議会をはじめ、市民団体、日本語教室や日本語学校等と連携しながら、さまざまな場面での多文化交流会を開催し、地域における自発的な開催につなげていきたい。

■ 来場者アンケート結果

アンケート回収率: 29/30

1. 本日のふり返し報告会はいかがですか。

大変満足	満足	あまり満足していない	不満
13	14	2	0

理由:

- ・私は昨年 4 月に高齢者大学校多文化国際交流科に入学し、人生で初めて外国人と交流を経験しましたが、留学生との交流で、優しい日本語で会話することで精一杯でした。本日の報告会は実践版で、とても勉強になりました。
- ・ディスカッションで色々伺えたのがよかったです。もう少し時間があればなおよかったと思います。
- ・多文化共生社会を作るためにはまずふだんからのつながり(あいさつ)が大切だとわかりました。
- ・大阪市内で外国人の方のことを考えている人たちはたくさんいることがわかりました。まだ一般的に”多文化共生”は認知が低いかも知れませんがこれからもっと広がってゆけると思います。
- ・外国の方と直接お話しできた。
- ・他の地域との交流。
- ・様々な質問がでたところ。
- ・「ふり返し」なので反省点が聞きたかった。
- ・人数もほど良く集まって意見を聞きやすいと思った。
- ・交流会の様子などが具体的にわかり良かった。「防災」交流イベントはみんなが参加しやすく役に立ち、よかったですね。
- ・時間がもう少しあればもっといろいろ話せたと思います。
- ・わかりやすく、生の会話がきけてよかった。
- ・直接外国人の方から困っていること等お聞きすることができた。
- ・同じ交流会でも多様な報告があり学び気づきにつながった。
- ・各区の多文化交流の実施状況がよくわかりました。そこで海外の方と交流されて命を護る安心安全の活動にとっても感心いたしました。
- ・各区の取り組みがうかがえたこと。
- ・他の国の方の生の話がきけてわかりやすかったです。

2. 期待していた内容と合致していましたか。

はい	いいえ	未回答
26	3	0

理由:

- ・多文化共生社会を築いていくために防災だけでなく外国人の方々がどんなことに困っていてどのような取り組みをしたのか、知りたかったです。
- ・良いことばかりの話が多かった。課題や問題点も聞きたかった。
- ・日本から見る外国人マナーの不備等を知らせることも大切だと思う。
- ・各区や地域の祭りの担い手が、外国人になっているのを初めて聞いた。
- ・一般的な模範解答のような気がした。

3. このふり返し報告会は、多文化共生のまちづくりへの理解に役立ちましたか。

とても役立った	少し役立った	あまり役に立たなかった	全く役に立たなかった	未回答
21	8	0	0	0

4. このふり返し報告会に参加して、日本に住む外国人と交流を試みようと思いましたか。

とても思った	少し思った	あまり思わなかった	全く思わなかった	未回答
27	1	0	0	1

「関わりたい」理由：

- ・彼らはこれからの日本の人手不足を支えて下さる貴重な人材と考えています。
- ・なるべく普段から不安を少なく生活してもらえるようにまずはあいさつから大切だと思いました。
- ・体系的な情報(日本での生活)の提供が必要であり、それに関連して自分の知見を活用できると思う。
- ・インドから介護に来日している人達と交流しています。
- ・もうすでに交流している。これ以上はぐうぜん以外はあまり広げる余裕がない。
- ・職場で様々な国々の人と接する機会が多いのでその人たちと交流するとともに働いている地域の人々への交流の場をつくっていきたいから。
- ・もっと海外の方の話をきいて参考にしたいと思った。
- ・お互いもっと理解しあうこと、出会うきっかけづくりが必要と思った。
- ・交流の仕方には様々な方法があるとわかったから
- ・現在ボランティア教室で交流させて頂いております。そこで色々な困っていることを聞きます。その中でこのような交流会があることを知らない方が多くいます。それは地域日本人に知り合いがいなかったということでした。
- ・勇気を出せる気持ちになりました。
- ・きっかけが必要だと思った
- ・時間が足りずに聞きたいことがまだまだあったのもっと交流したかった
- ・日頃からのちょっとした交流が無いと、いざという時にコミュニケーションが取れない。交流会が相互に知り合うきっかけになる。

5. 本日のご感想、ご意見があれば、お書きください。

<感想・コメント>

- ・つなげる交流会をする上で、苦労する点など共通した点があり地域に入り込んでやっていく難しさを改めて感じました。が、みんな同じ気持ちで頑張っているのだと思うとあきらめず続けて行こうと心強く思いました。どこの国の人かではなく「人と人」「お互いが知ろうとする気持ち」が地域をよくしていくためにも大切だなと感じました。ありがとうございました。
- ・私は2月8日9日のワンワールドフェスティバルで多文化交流について発表します。とても参考になります。生の意見がお聞きできて良かった。
- ・もっとたくさんの色々な人が交流出来るといいなあと思います。
- ・これからもこういったイベントを行ってほしい。
- ・多様なご意見を聞くことがあり良かった。
- ・本日はありがとうございました。市内の他区でもこのような交流は必要なことだと思います。
- ・みんなで話し合う一緒にしましょうでハードルをさげて共生していく関係をつくっていく。
- ・外国人の方も実際に交えてお話できる機会があつて良かった。

・グループディスカッションでは様々な質問があり面白味があった。

<主に、内容について>

- ・災害時コミュニケーションボードの普及。119 や AED の講習の普及をしてほしい。
- ・大阪市政の中で外国人の相談窓口は充実しているのですか？「やさしい日本語」の無料講習コースなどは開設されていますか？全国的な外国人サポートの情報交換の場はあるのでしょうか？
- ・外国人の参加者がもっとふえるとよいと思います。フレンドリーな会になると参加者が増えると思う。
- ・細かな情報を在日の方々に伝わる方法をあらゆるところで情報を共有していただければと思います。あいさつでコミュニケーションをとることがとても大切だと思いました。地域の在日の方にこれから挨拶をしていきます。

<主に、運営面について>

- ・時間が足りないところがあったかな？と思います。3H 設定の方がお互いに知り合うことができると思います。
- ・流れ段取りが良く充実してました。以前受講した「やさしい日本語」講座とても役に立っています。何語を使うかわからない方にも比較的話しかけやすい。
- ・またご案内してほしいです。参加いたします。

■記録写真



理事長挨拶



事務局から実施報告



区からの報告(西区)



区からの報告(中央区)



区からの報告(西淀川区)



区からの報告(東成区)



グループディスカッション

グループディスカッション まとめ

